

図10 『中国石窟 キジル石窟一』(平凡社, 1983)

〔付記〕 本稿の執筆にあたって、東山健吾先生に御指導、御助言頂いた。また佐野みどり先生にも御助言頂いた。なお「朝日敦煌研究員派遣」の際には上原和先生をはじめ選考委員の諸先生方、ならびに朝日新聞社の諸氏に御助力頂いた。ここに記して深く感謝の意を表したい。

果経』（宋求那跋陀羅訳、同）などにも見られる。

- 23) 「託胎・出城図」の図像構成については、主に『莫高窟二』及び『中国石窟 敦煌莫高窟三』（平凡社、1981）の図版解説を参照した。
- 24) 中国では北朝時代、石刻などで伝図と本生図が連続するように配される例が見られ、双方の間に厳密な区別の意識は持たれていなかったと考えられる。藤井有鱗館所蔵の北魏太安元年銘仏三尊像背面の浮き彫り図や個人蔵の北魏延興二年銘弥勒像背面の浮き彫り図などはその好例といえよう。
- 25) “作六牙象負釋迦在虛空中（中略）四月四日此像常出辟邪獅子導引其前”（『洛陽伽藍記』巻一「城内」長秋寺）。
- 26) 『莫高窟二』256頁、図版解説115、116より引用。
- 27) 馬世長「キジル石窟中心柱窟の主室窟頂と後室の壁画」（『中国石窟キジル石窟二』所収、平凡社、1984）173-175頁。
- 28) キジル石窟をはじめとした中央アジアの石窟では、窟頂と壁面の境界部分を巡って欄干上の伎楽天の図が連続して描かれる。宮治昭氏は中央アジアの石窟における“欄干上の楽天讃嘆”のモチーフと“兜率天上の弥勒菩薩”の図像との関係について、“欄干上の弥勒と楽天讃嘆の表現形式は、中央アジアで確立する天上世界のイメージと関係するものであろう”との見解を示し、また“天上界と地上界とを分かち、このような欄干上の楽天讃嘆のモチーフは、雲岡や敦煌にも見出される”とも指摘している（宮地昭『涅槃と弥勒の図像学』吉川弘文館、1992、460-462頁）。莫高窟第249窟でも天空の図の描かれた窟頂と壁面の境界部分に同様の欄干上の伎楽天図が配されており、また東山健吾氏が指摘するように敦煌の地では北朝時代を通じて弥勒信仰が盛んであったことから（東山健吾「敦煌莫高窟北朝期尊像の図像的考察」『東洋学術研究』第二十四巻、第一号、1985）、莫高窟の天空の図と中央アジアにおける天上世界のイメージや兜率天上の弥勒信仰との関係についても留意すべきであろう。

#### 図版出典

図1、2、3、6 『中国石窟 敦煌莫高窟一』（平凡社、1981）

図4、7、8、9 敦煌研究院撮影部提供。

図5 『敦煌石窟芸術 莫高窟第二九〇窟』（江蘇美術出版社、1994）

- 14) 『大正蔵』第一四巻。
- 15) 莫高窟隋時代の弥勒経変と維摩経変の組み合わせについては、既に賀世哲氏により指摘されている(賀世哲「敦煌莫高窟壁画中の維摩詰経変」『敦煌研究』1983、2、64頁)。安田治樹訳「敦煌莫高窟壁画中の維摩詰経変」(『東洋学術研究』第二十四巻、第一号、1985)では105-108頁。
- 16) 北魏後半期以降、神仙思想や道教に関わりの深い天上世界図の図像と弥勒菩薩の兜率天説法の図像とが、死後の昇天願望において結び付き、イメージが混同されていた可能性が考えられる(松原三郎「北魏の道教像」『佛教藝術』二十二号、1954、30-31頁・石松日奈子「北魏河南の一光三尊像」『東方学報』第六九冊、1997、278-279頁等参照)。あるいは莫高窟北朝から隋時代の天空の図と弥勒経変との関係においても、そうした影響が考えられるかもしれない。
- 17) 『莫高窟一』253-254頁参照。同仏伝図の場面比定に関しては、樊錦詩・馬世長「莫高窟第290窟的仏伝故事画」(『敦煌研究』1983、3)56-82頁に詳しい。
- 18) 『莫高窟二』238頁参照。
- 19) 高田修「仏教説話図と敦煌の壁画—特に敦煌前期の本縁説話図—」(『莫高窟二』所収)236-237頁。
- 20) 莫高窟が北朝末から隋時代にかけて主に礼拝の場へと変化した点については、1998年11月に馬世長氏より御教示を受けた。
- 21) 「託胎・出城図」に関しても現地調査以外に、「龍車・鳳車に乗る人物図」や「天井画の説話図」の場合と同様の資料で確認できるものについて提示した。なお、北魏の第438窟の作例については、神仙思想的図像の具体的な例は見られないとはいえ、傘蓋や雲気などの表現にそうした図像の影響が見られ、さらなる検討を要する。
- 22) 仏伝における“託胎”と“出城”の場面は、『修行本起経』(後漢曇果他訳『大正蔵』第三巻)では“於是能仁菩薩。化乘白象。來就母胎。用四月八日。夫人沐浴。(中略)。夢見空中有乘白象。光明悉照天下”“騫特自念言。今當足踏地。感動中外人。四神接舉足。令脚不著地”、『太子瑞應本起経』(呉支謙訳、同)では“菩薩初下。化乘白象。冠日之精。因母晝寢。而示夢焉。從右脇入”“徐令被馬褰裳跨之。(中略)。即使鬼神。捧舉馬足”との描写がそれぞれなされている。同様の記述は『過去現在因

## 註

- 1) 孫作雲「敦煌画中的神怪画」(『考古』1960、第六期) 31-33頁。  
段文傑「早期の莫高窟芸術」(『中国石窟 敦煌莫高窟一』以下『莫高窟一』所収、平凡社、1980) 191-192頁。  
段文傑「略論莫高窟第249窟壁画 内容和芸術」(『敦煌研究』1993、3) 1-9頁。
- 2) 賀世哲「敦煌莫高窟第二四九窟窟頂西披壁画内容考釈」(『敦煌學輯刊』3、1983) 30頁。
- 3) 「龍車・鳳車に乗る人物図」の作例に関しては現地調査以外に、敦煌研究院より提供された写真資料、『敦煌石窟内容総録』(文物出版社、1996)、『莫高窟一』、『中国石窟 敦煌莫高窟二』(平凡社、1981、以下『莫高窟二』)の図版及び解説などで確認できるものについてここに提示した。
- 4) 「天井画の説話図」の作例に関しても現地調査以外に、「龍車・鳳車に乗る人物図」の場合と同様の資料で確認できるものについて提示した。
- 5) 『中国石窟 麦積山石窟』(平凡社、1987) 図版164-171及び解説を参照。
- 6) 「龍車・鳳車に乗る人物図」の図像構成については、主に『莫高窟一』及び『莫高窟二』の図版解説を参照した。
- 7) 第249窟の天空の図の画面構成等に関する委細は、『莫高窟一』242-243頁の図版解説を参照した。
- 8) 寧強「上土登仙図与維摩詰經變 莫高窟第二四九窟窟頂壁画再探」(『敦煌研究』1990、1) 30頁。
- 9) 斎藤理恵子「敦煌第二四九窟天井における中国的図像の需要形態」(『佛教藝術』二一八号、1995) 39-56頁。
- 10) 前掲、寧「上土登仙図与維摩詰經變 莫高窟第二四九窟窟頂壁画再探」35-36頁。  
段文傑「道教題材是如何進入仏教石窟的 莫高窟249窟窟頂壁画内容探討」(『段文傑敦煌芸術論文集』所収、甘肅人民出版社、1994) 318-334頁。
- 11) 佐々木律子「敦煌莫高窟第二八五窟西壁 内容解釈試論」(『美術史』142号、1997) 135-136頁。
- 12) 『大正新脩大藏經 (以下『大正藏』)』第一四卷。
- 13) 『莫高窟二』251頁。

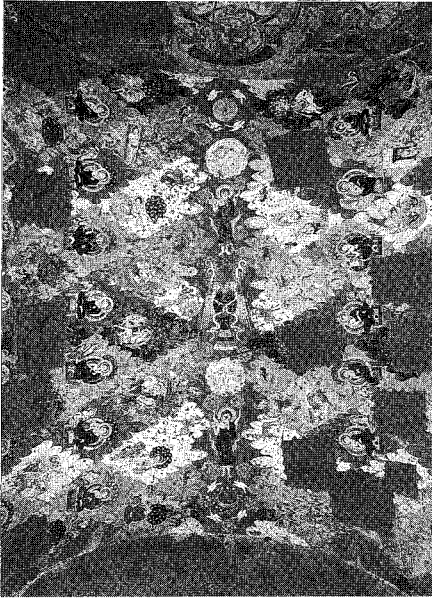


図10 キジル石窟第38窟窟頂ヴォールト部分

ところで、「龍車・鳳車に乗る人物図」と「天井画の説話図」が同一窟の窟頂やその周辺に描かれる例として、莫高窟以外にも麦積山石窟第127号窟が挙げられることははじめに述べた通りである。龍車に乗る人物図の方だけとはいえ両図の組み合わせの例としては時期的に莫高窟に先んじる点や、より中原に近い地域での作例として貴重なものといえる。また、クチャのキジル石窟ではヴォールト天井の最頂部にあたる中軸部分に日天・月天・風神・辟支

仏・金翅鳥・蛇形龍などを帯状に配した「天象図」とよばれる天空の図が描かれており<sup>27)</sup>、その両側には説話図の諸場面が菱形区画の画面にびっしりと描かれている〈図10〉。敦煌と比較的近い地理関係に位置する石窟において、天空の図と説話図を共に描いた天井画の例として興味深く、むしろ天空の図における両者の図像の違いや説話図の形式の違いなどからも安易な比較はできないとはいえ、両図を組み合わせるという点において莫高窟との影響関係は無視できないものであろう<sup>28)</sup>。

さて、本論においては特に「龍車・鳳車に乗る人物図」の主題や天空の図の思想面について言及しなかったが、今回の考察を単なる壁画の配置の問題にとどめず、こうした問題に取り組む上でのひとつの足掛かりとして検討を進めてゆきたい。

とからとり入れられたにすぎないのではないかと考える。同図が「天井画の説話図」と時期的に前後して窟内に頻繁に現われるようになった点からも、これら二図の間にも「龍車・鳳車に乗る人物図」の場合と同様にやはり何らかの意味的な繋がりが持たれていた可能性は十分に考えられよう。

ところで、「託胎・出城図」に仏伝からこの二場面が選ばれた要因について、敦煌文物研究所編『中国石窟 敦煌莫高窟二』の図版解説に“菩薩の俗界への降下と、これを離脱して悟り、すなわち成仏を目指す菩薩をおそらく特別重要視した<sup>26)</sup>”との指摘がなされている。こうした思想は敦煌を含む河西地方で盛んに行なわれていた禅の修行の伝統に根付いていたと考えられるが、もしそうであれば菩薩行の末に悟りを得、俗世界を脱し、天上世界（あるいは浄土）に昇るといった信仰における理想のかたちがこの図に少なからず反映されていたことになろう。釈尊が天上より俗世に降り、また俗世より天上に昇る姿がともに表わされた「託胎・出城図」では、天上世界と俗世界を繋ぐイメージがいつそう強調されているようである。いうなれば、天上世界と関わりの深い「龍車・鳳車に乗る人物図」と供養者による奉納の役割を持ったであろう「天井画の説話図」とが、組み合わされて配される関係そのものが、「託胎・出城図」においてより象徴的に表現されているとも解されよう。

## 結

以上、莫高窟北朝から隋時代の「龍車・鳳車に乗る人物図」と「天井画の説話図」が同一窟に配される問題について考察してきた。「龍車・鳳車に乗る人物図」は天上の理想世界というイメージを伴って窟頂やその周辺の壁面を荘厳し、「天井画の説話図」は供養者による死後の昇天願望と共にそれらの図に隣接する位置に奉納されたものと考えられる。また、「託胎・出城図」は両図の関係を意味的に引き継ぎながら、天上世界と俗世界を繋ぐものという意味合いをも強めていたようである。

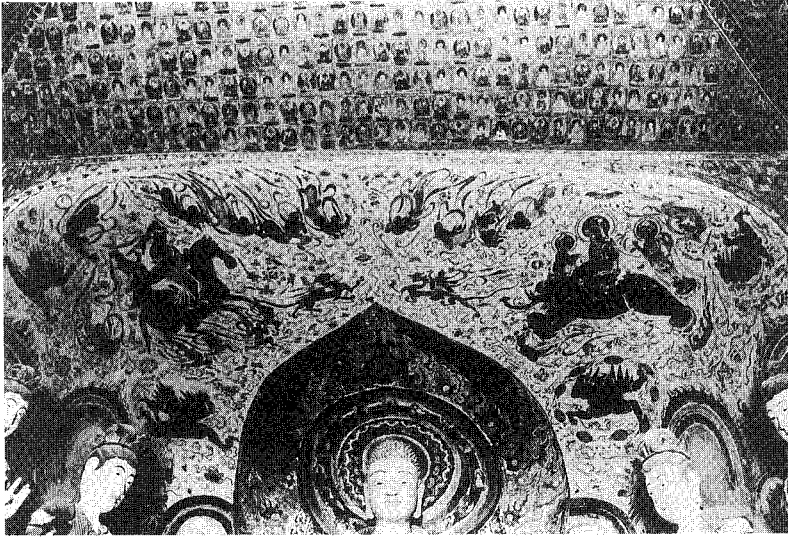


図9 莫高窟第329窟正壁龕頂部

指摘することは難しいといえる。というのも、まず「天井画の説話図」ではその主題における本縁説話図の割合が圧倒的に多いとはいえ、本生図に比べて仏伝図の作例が極めて少ないことは一目瞭然であり、また同図の作例中における保存状態が完好な仏伝図の唯一の例ともいえる第290窟の図では、“託胎靈夢”の場面に乗象の菩薩の姿は描かれていないのである。しかしながら、この時期の本縁説話図における仏伝図と本生図の意識的な区別はそれ程厳密ではなかったようであるし<sup>24)</sup>、また乗象の菩薩像については『洛陽伽藍記』中の降誕会に関する記述に<sup>25)</sup>、

六牙の白象の釈迦負ひて虚空中に在るを作す。(中略) 四月四日に、此の像常に出で、辟邪の獅子、其の前を導引す。

とあるように、少なくとも北魏の遷都後の洛陽では既に降誕会、いうなれば釈尊の誕生の場面と馴染みの深いものだったのであり、「託胎・出城図」においては図像として“出城”の場面との対時性がより際立つこ

付表・3 「託胎・出城図」

窟番号	時代	配置位置	神仙思想的図像
431	北魏	中心柱南面東西北部	なし
278	隋	正壁龕外南北上部	なし
383	隋	正壁龕外南北上部	なし
397	隋	正壁龕頂部南北	飛廉×1
57	初唐	正壁龕外南北上部	なし
283	初唐	正壁龕外南北上部	なし
375	初唐	正壁龕外南北上部	なし
322	初唐	正壁龕内側南北上部	鬼神×2
209	初唐	伏斗形窟頂西面下部南北	なし
329	初唐	正壁龕頂部	鬼神×2・風神×1・雷神×1 ほか
386	初唐	正壁龕頂部	なし(剝落)

想世界のイメージと関わりが深いと考えられることはこれまでも何度か触れてきたことであるが、「託胎・出城図」の作例の内の幾つかにも天空の図と関わりの深い神仙思想的な図像が含まれていることを指摘しておきたい(具体例については、付表・3を参照)。中でも第329窟の「託胎・出城図」では、広く鑿たれた龕頂部分全体にわたって左右に配されたそれぞれの菩薩を先導する騎獣の仙人、または風神・雷神などの姿も描き出され、さながらこれ自体が天空の図そのもののように見える(図9)。すなわち、「託胎・出城図」は「龍車・鳳車に乗る人物図」と時期的に丁度入れ替わるようにして、ほぼ同じ位置に、同じく空を飛ぶ姿をとる対の図として出現したのであり、同時に図像の一部とともに天空のイメージをも引き継いでいると考えるべきであろう。

一方、「託胎・出城図」が仏伝中の場面を表わす以上、この図を仏伝図ないし説話図の一形式として捉えることには何ら問題はないだろう。しかしながら「託胎・出城図」において窟頂やその周辺の部位に描かれた説話図であるという以上に、「天井画の説話図」との直接的な関係を





図7 莫高窟第397窟正壁龕頂部北側「託胎  
図」



図8 莫高窟第397窟正壁龕頂部南側「出城  
図」

るのはそのほとんどを占める隋時代及び初唐時代のものに限ることとする。作例は、隋第278窟、第383窟、初唐第57窟、第283窟、第375窟が正壁龕外南北上部、隋第397窟、初唐329窟、第386窟が正壁龕頂部、初唐第322窟が正壁龕内側南北上部、初唐第209窟が伏斗形窟頂西面に確認される(付表・3を参照)<sup>21)</sup>。同図は、仏伝の“託胎”と“出城”の場面を表したものとされ<sup>22)</sup>、白象に乗る菩薩と白馬に乗る菩薩(第397窟のみ如来)が虚空に浮かぶ姿を対に表わし、それぞれの周囲に琵琶や箏篋を演奏する伎楽天、飛天らを配した図像群よりなる<sup>23)</sup>。基本的に託胎図の方が北側、出城図の方が南側に配される(第383窟、第209窟では南北逆)〈図7、8〉。

興味深いのは、窟内においてこの図の描かれる位置が「龍車・鳳車に乗る人物図」のそれにほぼ一致していることである。また、比較的近い時期に制作されたと考えられる第401窟の「龍車・鳳車に乗る人物図」と第397窟の「託胎・出城図」は、どちらも正壁龕頂の南北部分に描かれ、画面上の図像配置の状態をはじめとして、流動的な筆致や華やかな彩色といった作風の面でも類似点が見出せる。また、「龍車・鳳車に乗る人物図」が神仙思想的な図像群により構成され、かつ天空や天上の理

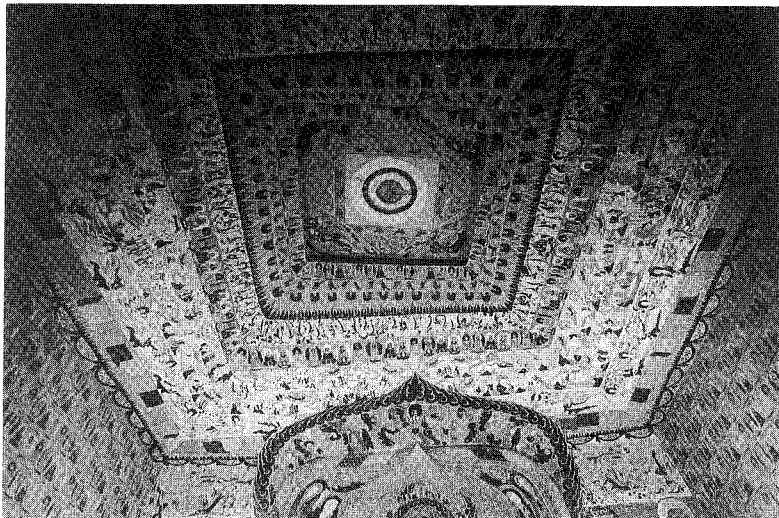


図6 莫高窟第296窟窟頂および正壁上部

ことになったものと考えられるが、これらの説話図に自己犠牲の功德や布施等に関わる主題を描いたものが多いのも、あるいはこうした背景によるものかもしれない。

はじめに述べたように、「龍車・鳳車に乗る人物図」と「天井画の説話図」は作例のほぼ半数が同一の窟の互いに隣接した位置に配されている〈図6〉。先に検証したように「龍車・鳳車に乗る人物図」は窟頂やその周辺部に天空や天上の理想世界に関わる図として描かれたと考えられる。「天井画の説話図」はそれらの図に近い位置に描かれることで、天上に奉納されたものと考えられるのである。

### 3、「託胎・出城図」

ここで、「龍車・鳳車に乗る人物図」と「天井画の説話図」の両図に関係が深いと考えられる図として「託胎・出城図」を示しておきたい。この図では、一例だけが北魏時代の作とされているが、本論で取り上げ

端の“三太子出遊”から左端の“山中狩猟”まで進んで、東面に移り右端の“捨身施虎”から左端の“起塔供養”までの十三景が順に展開するが、シュヤーマ本生は右側の国王出猟の場面と左側のシュヤーマが老いた両親に孝行を尽くす場面が同時進行するように描かれ、中央に国王に誤って射殺されたシュヤーマが蘇生するクライマックスの場面が描かれている<sup>18)</sup>。伏斗形窟頂に描かれた例では、他に二層の上段と下段を行き来する上下式のものが見られる。

莫高窟では北朝時代を通じて仏伝・本生・譬喩の本縁説話を描いた作例はわりあい多く見られるが、北朝前半期にはそれらは窟壁面の中層部に比較的大きく描かれる場合が多かった。それに対して後半期より出現する「天井画の説話図」は窟頂に描かれており、位置的に制作段階における困難は想像に難しく、さらにはそれまでの説話図が帯びていたであろう「絵解き」の役割にも適さない状況下に置かれているといわざるを得ない。説話図が窟頂に配されるようになった経緯としては、もともと小乗仏教的な主題ともいえる本縁説話図が大乗仏教の盛隆とともに軽視されるようになり、窟内において周縁部分とされる窟頂に追いやられたためと考えるのが一般的であった<sup>19)</sup>。

しかしながら「天井画の説話図」の作例は数量的にそれ以前の説話図を凌駕する程であり、主題もそれまでには見られない新しいものを含み、また画面形式の上でも場面転換に樹木や建物を利用し、榜題を付した短冊形を挿入して物語の展開をスムーズにするという伝統的な手法がより巧妙で精緻なものへと発展を遂げているのが見てとれる。すなわち「天井画の説話図」は、単なる追いやられたものとして窟頂に配されたにすれば、やや複雑すぎる諸相を示すように思われる。ただし、礼拝空間において天井という部位に説話図の類いが描かれるのは莫高窟に限ったことではなく、こうした配置自体に特別な意味を見出そうとするのは難しいのかもしれない。しかし北朝末から隋という時期に、莫高窟が主に修行の場から礼拝の場へとあり方を移行させた過程において（ただし北区を除いて<sup>20)</sup>）、壁画に描かれた説話図もその機能を多様化させた可能性は十分に考えられる。おそらくは説話や経典の奉納に近い役割を帯びる

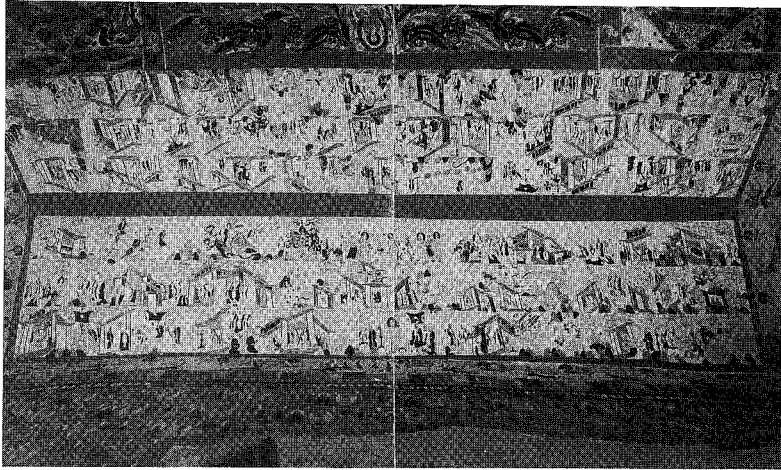


図5 莫高窟第290窟窟頂人字披部分

で人字披窟頂東西両披や伏斗形窟頂四方斜面に描かれた説話図を「天井画の説話図」とよぶこととする。具体例としては人字披窟頂の方が北周第290窟、隋第302窟、第303窟、第417窟、第423窟、第419窟に、伏斗形窟頂の方が北周第296窟、第294窟、第438窟、第299窟、北周末隋初第301窟に見出せる。それぞれの説話図の主題や画面形式などについては付表・2に簡単にではあるが示しておいたので参照頂きたいが、その内代表的な例についてののみ人字披窟頂のものと伏斗形窟頂のものを各一例ずつ挙げてもう少し詳しく見ておきたい。

まず、第290窟の例は主題が仏伝であり、人字披窟頂の東西斜面を三層ずつ計六層に分けた画面中を全部で八十七景からなる物語が展開する。場面は東披右上の“託胎靈夢”から左下の“思念出家”までS字に進み、西披に移って右上“太子納妃”から左下“成道”までやはりS字に進んでゆく<sup>17)</sup>〈図5〉。人字披窟頂に描かれた例では、このようなS字式のもののほかに二層ではC字式、また一層に一〜二場面ずつ横並びに配したものを組み合わせる場合が多い。

また第301窟では伏斗形窟頂の東・南面にサッタ太子本生図、北面にシュヤマ本生図が一層ずつ描かれている。サッタ太子本生図は南面右

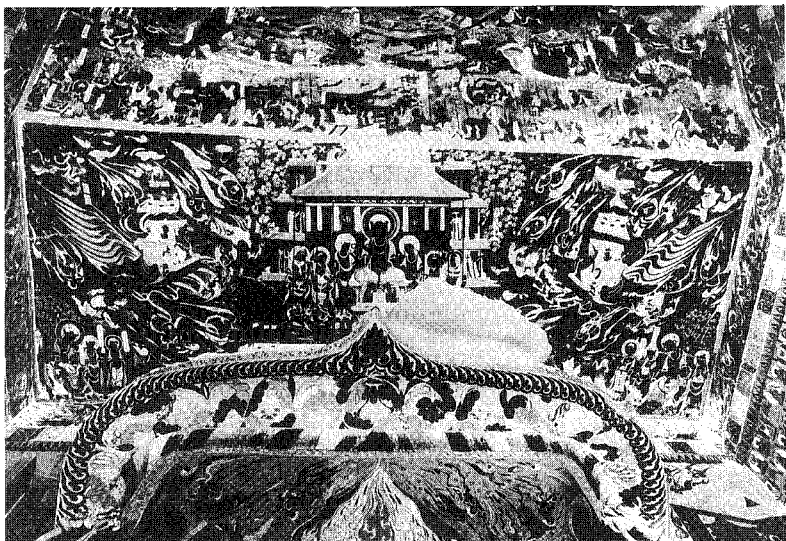


図4 莫高窟第419窟窟頂平天井弥勒経变

面中央に置かれた殿屋に向かって左右より馳せ参じるように配されている。ここに描かれている浄土世界は、いうなれば当時の仏教信仰に基づく天上の理想世界のあり方を反映するものであり、③の「龍車・鳳車に乗る人物図」もその一部として当然そうしたイメージとの関わりが深いものと考えられる<sup>16)</sup>。

以上、「龍車・鳳車に乗る人物図」をその配置状態から三つのパターンに分けて見てきたが、①②③は図像面だけでなく、意味的にも天空ないし天上の理想世界という点である程度共通する概念を引き継いでいるようである。もしくは「龍車・鳳車に乗る人物図」そのものにそれぞれを繋ぐ何らかの意味合いが象徴されている可能性も考えられよう。

## 2、「天井画の説話図」

はじめに述べたように、莫高窟の北周から隋にかけて横長説話図形式

そうしたイメージと深く関わりを持つものと考えられよう。

次に②では、「龍車・鳳車に乗る人物図」は北周第296窟、第294窟の正壁龕外南北上部、隋第401窟の正壁龕頂部にそれぞれ単独で描かれおり、図画的には①にほぼ一致する。また、②の内の二例が描かれている正壁の龕外南北上部という部位は、西魏第285窟の同部分に日・月や星辰に関わるとされる「天空」の図が描かれていることから<sup>11)</sup>、同時期の窟においてそうした図が描かれる場所のひとつとして認識されていた可能性が考えられ、また残る一図の描かれる正壁の龕頂部にも、早い時期から雲気や飛天など天空の図と馴染みの深い図案が配されることが多かった。すなわち、②の「龍車・鳳車に乗る人物図」も天空ないし天上の理想世界のイメージと無関係ではないと考えられるのである。

最後に③は、長方形プランで前部に人字披窟頂を備える窟の後部天井部分に、隋第417窟、第419窟では弥勒上生経変、第423窟では維摩経変の一部として「龍車・鳳車に乗る人物図」が描かれている。弥勒上生経変は『佛説觀彌勒菩薩上生兜率天經』（宋沮渠京聲訳<sup>12)</sup>の記述に基づいて、弥勒菩薩が兜率天の内院に座して諸天に説法する有様を描いた図とされており、画面中央に置かれた平屋造りの殿屋内に脇侍菩薩や天部らに護られた椅座の弥勒菩薩、左右の三から四層造りの楼閣内には楽器を奏でる伎楽天を描く。このような画面構成は、同じく隋時代前半とされる第423窟や第433窟の窟頂部に描かれた同経変図におよそ共通するものである<sup>13)</sup>〈図4〉。また維摩経変は『維摩詰所説經』（姚秦鳩摩羅什訳<sup>14)</sup>巻中「問疾品」の場面に基づくとき、画面中央の平屋造りの殿屋内に対峙して座す維摩居士・文殊菩薩と弟子たち、天部らが描かれている。莫高窟の隋時代には維摩・文殊の問答図を描いた図を比較的多く確認できるが、そのほとんどが正壁龕外南北上部にそれぞれ対になるように配されている。ところで、弥勒上生経変と維摩経変は第433窟では窟頂の同一画面中、第417窟、第423窟、第419窟では窟頂周辺の比較的近い部位に配されている。これら二つの経変図に何らかの意味的な結びつきがあったとすれば興味深く、機会があればさらに掘り下げてみたい問題である<sup>15)</sup>。さて、「龍車・鳳車に乗る人物図」はこれら経変図の画

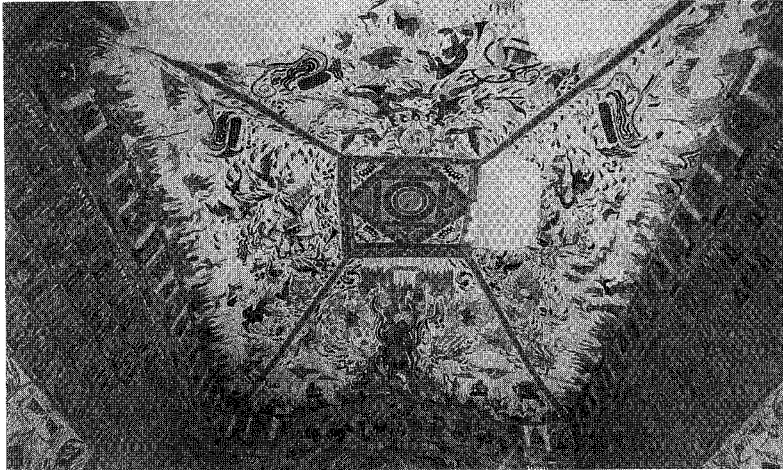


図3 莫高窟第249窟窟頂

も第249窟の西面の図は特異であり、画面中央に中程が窄まった形状の山岳が聳え、中腹には二体の龍が巻き付き、頂上には半ば開かれた門闕と城壁が置かれ、またその左右に日・月、前面に四面四臂の巨人が麓の大海から立ちほだかる様が描かれている<sup>7)</sup>〈図3〉。この山岳図は従来通りに須弥山図と解される一方で昆崙山図とする見解も示されるなど<sup>8)</sup>、他二窟のものも含む天空の図全体の主題解釈の問題とも関連して様々な議論が展開されてきた。天空の図中に神仙思想的な図像が混入して描かれていることは早くから指摘されてきた通りであり、この山岳図に限らず、そうした図像が仏教の中国伝来時より続く格義仏教の流れを受けてかたちだけが取り入れられたものなのか<sup>9)</sup>、それとも神仙思想あるいは道教の思想的要素を図像として引き継いだものなのか<sup>10)</sup>という論議には、残念ながら完全な解決がなされたとは言いがたい。むしろこれは「龍車・鳳車に乗る人物図」の主題解釈に深く関わる重要な問題でもあり、別稿で改めて所見を述べたいが、ただこうした思想上の問題は別にしても天空の図に当時の中国で広く認知されていた天上の理想世界のイメージが反映されていたとする見解は、どちらにせよ一致するものと思われる。当然、①の「龍車・鳳車に乗る人物図」もその一部として、

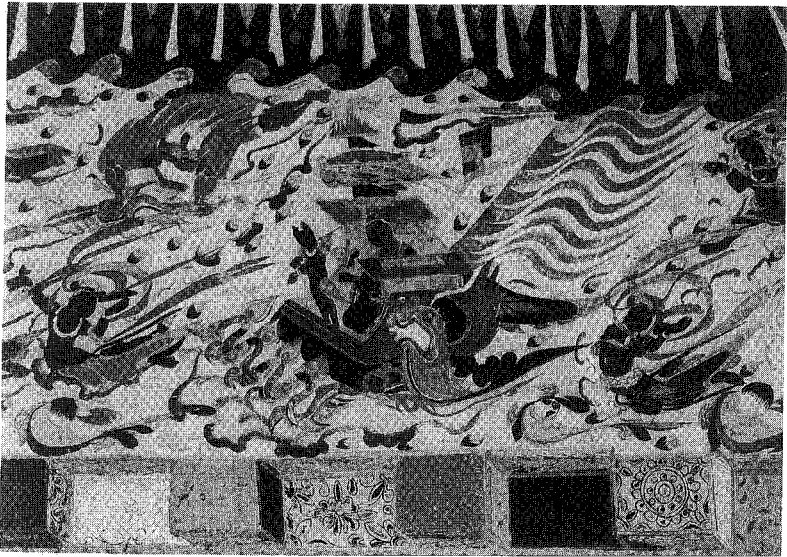


図1 莫高窟第305窟窟頂北面「龍車に乗る人物図」

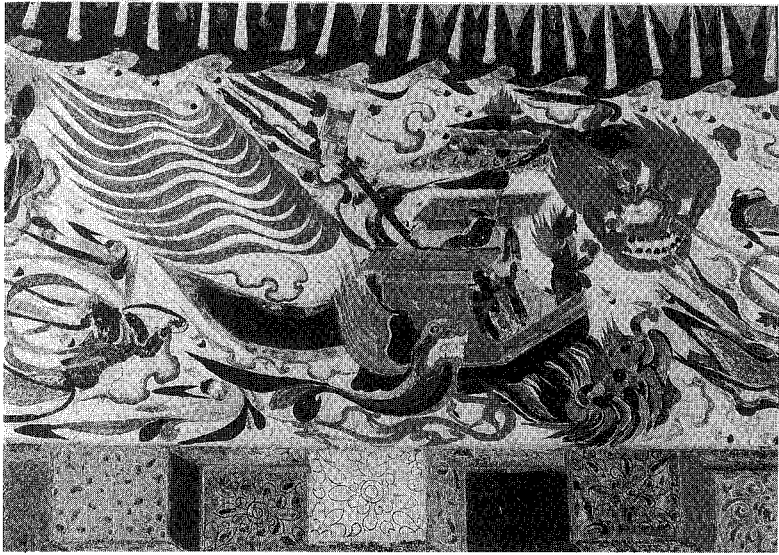


図2 莫高窟第305窟窟頂南面「鳳車に乗る人物図」



図像や窟内における配置状況等を順次検証してゆくとともに、両図と関わりが深いと考えられる図として隋から初唐時代に多く現われる「託胎・出城図」に関する所見も交えながら、それぞれの図を繋ぐ関係の一端を明らかにしてゆきたいと考えている。なお、本論において提示する作例のデータは1997年6月から8月にかけて行なった「朝日敦煌研究員派遣」における莫高窟の現地調査に基づくところが大きい。御指導、御高配下さった敦煌研究院の諸氏に、はじめに厚く御礼申し上げておきたい。

## 1、「龍車・鳳車に乗る人物図」

第一に、「龍車・鳳車に乗る人物図」の図像構成について見てゆくことにする。三体から四体の龍（もしくは鳳凰）の牽く車籠が、先端が帯状に分かれた大型の旗をなびかせながら雲気の中を進み、中には漢民族風のゆったりとした着衣をまとった人物がそれぞれ御者を従えて座っている。車の傍らには鯨鯢・文鯨とよばれる怪獣が跳躍し、周囲には鳥獲とよばれる有翼の鬼神や飛天などが飛び回る姿が描かれており、龍車の方が北側、鳳車の方が南側に互いに対峙するように配される<sup>9)</sup>（図1、2）。

先にも少し触れたように、「龍車・鳳車に乗る人物図」はその配置の状態などから描かれ方をおよそ三つのパターンに大別することができる。すなわち、①天空の図の一部として伏斗形窟頂南北面に配置されたもの、②単独で正壁龕外南北上部や正壁龕頂部に配置されたもの、③経変図の一部として窟頂平天井部南北に配置されたもの、である。

まず、①の「龍車・鳳車に乗る人物図」の具体的な作例としては西魏第249窟と隋第305窟の図が挙げられる。莫高窟において天空の図はこの二窟の他に西魏第285窟にも見出され、伏斗形窟頂四方斜面全体にわたって流動する雲気と共に飛び回る仙人や飛天、怪獣などが描かれる同図の画面構成の中で、三窟はそれぞれ微妙に異なる様相を呈するが、中で

付表・2 「天井面の説話図」

窟番号	時代	仏伝	説話図の主題	窟頂形	画面<場面>形式	出典	「龍車・鳳車に乗る人物図」
290	北周	善事太子本生	善事太子本生 微妙比丘尼因縁 福田経变	人字披	3層<S字式>×2面	「修行本起経」・「過去現在因果経」	「龍車・鳳車に乗る人物図」
296	北周	微妙比丘尼因縁 福田経变		伏斗形	2層<上下式>×4面	「賢愚経(善事太子入海品)」 「賢愚経(微妙比丘尼品)」 「仏説諸徳福田経」	正壁龕外南北上部
294	北周	仏伝?	善事太子本生 微妙比丘尼因縁 福田経变	伏斗形	不明	不明	正壁龕外南北上部
438	北周	シユヤマト子本生 シユヤマト子本生		伏斗形	不明(全面に剥落)	「隋子経」 「金光明経(舍身品)」	
299	北周~隋	シユヤマト子本生 シユヤマト子本生	善事太子本生 微妙比丘尼因縁 福田経变	伏斗形	1層×3面(1面剥落)	「隋子経」 「金光明経(舍身品)」	
301	隋	シユヤマト子本生 シユヤマト子本生		伏斗形	1層×3面	「隋子経」 「金光明経(舍身品)」	
302	隋	快日王本生 月光王本生 虔闍尼婆梨王本生 ヒリビ王本生 婆羅門本生 シユヤマト子本生 シユヤマト子本生 福田経变	善事太子本生 微妙比丘尼因縁 福田経变 他8種	人字披	2層×2面	「賢愚経(快日王施眼縁品)」 「賢愚経(月光王施頭品)」 「大智度論(釈初品)」 「賢愚経(梵天請法六事品)」 「賢愚経(菩提本生)」 「大般涅槃経」 「隋子経」 「金光明経(舍身品)」 「仏説諸徳福田経」	
303	隋	法華経(普門品・見宝塔品)变		人字披	2層(C字式)×2面	「妙法蓮華経(普門品・見宝塔品)」	
417	隋	金光明経(流水長者子品)变 シユヤマト子本生	善事太子本生 微妙比丘尼因縁 福田経变	人字披	2層×1面(1面剥落)	「金光明最勝王経(流水長者子品)」 「隋子経」	窟頂平天井部南北
423	隋	スダーナ太子本生		人字披	3層?<不規則>×1面	「太子須大勢経」	窟頂平天井部南北
419	隋	スダーナ太子本生 サツク太太子本生 法華経(譬喩品)变	善事太子本生 微妙比丘尼因縁 福田経变	人字披	3層×1面・4層×1面 *	「太子須大勢経」 「金光明経(舍身品)」 「妙法蓮華経(譬喩品)」	窟頂平天井部南北
420	隋	法華経变		伏斗形	3層?<不規則>×4面	「妙法蓮華経」	

・画面形式の項で特に記述のないものは水平方向のみの展開であることを示す。また、\*印では3層の方はS字式、4層の方は上3層がS字式で下1層が水平方向にそれぞれ展開する。

・「龍車・鳳車に乗る人物図」の項で、窟内における配置が示されていない窟には同図は確認されないことを示す。

付表・1 「龍車・鳳車に乗る人物図」

窟番号	時代	配置位置	神仙思想的図像
249	西魏	伏斗形窟頂南北面	*
296	北周	正壁龕外南北上部	鬼神×2
294	北周	正壁龕外南北上部	不明
305	隋	伏斗形窟頂南北面	*
417	隋	窟頂平天井部南北	なし
423	隋	窟頂平天井部南北	なし
419	隋	窟頂平天井部南北	鬼神(2種)×6
401	隋	正壁龕頂部	鬼神×2・朱雀×2・飛廉×1

\*印は天空の図中に表わされており、具体的な図像についての記述は省略した。

また、北周から隋時代にかけて窟頂の広範囲にわたって説話図が天井画として描かれている例が幾つか見られるが、これらをここでは「天井画の説話図」と総称することにする。こうした説話図は、フリーズ式、画卷(長巻)式などともよばれる横長・多景の画面形式(以下、横長説話図形式という)をとり、その主題には全体のほとんどを占める仏伝・本生・譬喩の本縁説話図のほかに、一部の経変図が含まれている(付表・2参照<sup>4)</sup>)。

これら「龍車・鳳車に乗る人物図」と「天井画の説話図」の二図は窟内の荘嚴としての意味を互いに異にしているように見える。しかしながら両図の作例の約半数は「天井画の説話図」と同一の窟に描かれているのであり、またそれぞれが窟頂やその周辺という相互に隣接した場所に配されている点も、両図を繋ぐ何らかの関係を示唆するようである(付表・2参照)。また、莫高窟以外でも天水麦積山石窟の西魏時代に象頂(横長伏斗形窟頂)の四方斜面に横長説話図形式による説話図が描かれ、同じ窟頂の中央平天井部分に、龍車に乗る人物の方だけではあるが、莫高窟のものとはほぼ同形の図が描かれている<sup>5)</sup>。

本論においては「龍車・鳳車に乗る人物図」と「天井画の説話図」の

# 敦煌莫高窟の「龍車・鳳車に乗る人物図」と 「天井画の説話図」についての一考察

——「託胎・出城図」との関わりを交えて——

田 中 知佐子

## 序

敦煌莫高窟では早期より窟頂はラテルネン・デッケ（三角持ち送り）や、飛天、蓮華化生などの図案、パルメットや蓮華、雲気などの装飾文様を描いた壁画によって埋め尽くされてきた。しかし北朝時代の後半から隋時代に入ると、華蓋形式の藻井を中心に据えた伏斗形窟頂の四方斜面にいわゆる天空の図が描かれたり、同じく伏斗形窟頂の四方斜面や人字披（切妻）窟頂の両斜面に説話図が描かれるなどの変化が現われるようになる。

天空の図は西魏および隋時代の三例が確認されるが、その内の二例では窟頂の南北に当たる面の中央部分に、龍車に乗る人物と鳳車に乗る人物を描いた図がそれぞれ対になるように配されている。これと同様の図像は、近い時期の窟で正壁の龕外南北上部や窟頂の平天井部などの部位に、単独あるいは変相図の一部として配された例にも見出すことができる。この図像の主題の解釈をめぐって主に段文傑氏による東王公・西王母説<sup>1)</sup>と、賀世哲氏による帝釈天・帝釈天妃説<sup>2)</sup>とに見方が分かれているのは周知のごとくであるが、それに関する詳しい検証は別稿に譲ることとして、ここでは特にこの図を「龍車・鳳車に乗る人物図」とよぶこととしたい（付表・1参照<sup>3)</sup>）。